

# 人間の経済

第2期 第 **58** 号 (通巻 136号) 2006年8月28日

## 目次

WATと近隣形成 3

-宇観、宙観と多中心性-

フラットな関係

西周における宇観、宙観

上下四倍を生きる

森野 榮一

quote of this week/

五十歩百歩-「貧乏人の定理」より-

エーリヒ・ケストナー/斎藤由紀子 訳

週刊マーケットレター(06年8月21日週号)

主要マーケット指標

米消費者物価の上昇はまだ続く

米国の原油輸入減で原油高もピークか

曾我 純



# WATと近隣形成 3

うかん ちゅうかん  
— 宇観、宙観と多中心性 —

森野 榮一

## フラットな関係

WATは近隣社会において、また、i-WATはネット利用において、フラットな関係のなかで、その紐帯を強くするかたちで機能しています。また両者とも地理的空間を異にする人たちが相識関係にたつことで、これまでになかったクラスタを形成しはじめてもいます。

むかし、人々が交わるを上交下接といいましたが、そこでは人の関係は上に交わり下に接するわけですから上下に構造化されていました。

しかし今日、私たちは上下でなく、前後左右につながりをもつ横の関係を特色とする場を少なくとも二つ所有しています。一つは地域社会であり、もう一つはインターネットです。

そこでは、ある組織でステータスが上であるとか、権力を握っているとかは無関係です。どんなに企業でエライ人も地域に来れば、住民です。つまり組織のなかの上役、下役も関係ありません。もちろん近隣社会には、旧来の上下関係を色濃く残すボスやお偉方も存在し、そうした人々の支配する旧来の住民組織もあります。しかし、それらは都市化のなかで形骸化の一途をたどっているようにみえます。各地に動き始めている住民の取組はコミュニティづくりの方向のなかで地域の対等な仲間がつくる組織を生み出し始めているようにみえます。

そうした空間でどのような関係形成が芽生えはじめているのか興味あるところです。それはこの二つの空間でWATが作り始めているものでもあるからです。

そこでの特質は二つあるようにみえます。一つはいま述べたヒラの関係（仲間たち：peersの関係）、もう一つは多中心性です。

前者は地域づくりのツールのひとつとして活用されてきた地域通貨が交換のシステムであることによく示されています。地域通貨は交換の観念に光をあてたといえますが、それは独りではなしえません。必ず他者を必要とし、人が相互依存の関わりにあることを指し示していますし、財や役務を他者から提供され、なんらかの返礼によってそれに報いる行為は、両者が対等な関係であることをなによりもまず意味しているからです<sup>1</sup>。

では多中心性とはなんでしょう。それは関与する主体がだれでも他に依存して行為するのでなく、自己の意思で自在に振る舞うことを意味しています。私が私の行いの中心であるように、他者もまたその行為の中心であることを認めることです。

その意味するところを、いまここで、空間という言葉を使いましたが、その理解のなかに探ってみましょう。

<sup>1</sup>位階的な社会を次第に変質させる交換の歴史的論理については、拙稿、「推転と系列的弁証 - 二宮尊徳『三才報徳金毛録』解読の手がかりを求めて - 」、『自然と実学』、第三号、2003年11月参照。

## 西周における宇観・宙観

地域社会もインターネットも私たちが関係を作り出しうる場です。そうした空間や場は私たち一人ひとりとは無関係に存在しているように考えてしまいがちです。なんらかの積極性がないと、自分には無関係にみえてしまうからです。

しかし空間とはあらためて考えてみるに、それによってなにが理解されるべきなのでしょう。凡そ古典というものは見過ごしてしまいがちな論点に注意を喚起してくれるようです。

例えば、幕末・明治初期の知の巨人、西周は、おそらくは明治初期（明治2、3年から5、6年の、彼の理論の大成期）に書かれたと推定されている『生性發蘊』で、カントの哲学に言及してこう述べていました。

人ノ性上ニ、固有ノ靈知アルハ、猶家室ノ窓牖アリテ、明ヲ受ルガ如シ、靈知ノ区シテ以テ別スルハ、猶窓格ノ区シテ以テ別スルカ如シ、諸影ノ牖ヲ透シテ映スルハ、上下左右ノ窓格ニ随ハサル莫シ、故ニ感覺ノ我カ心ニ映スルモ、亦此固有靈智ノ觀念ニ従ハサル莫シト、今其一ツヲ挙クレハ、靈智ノ窓格ハ、宇観ト宙観トノ如シ、人ノ靈智上、先天ヨリシテ、上下四方ト、古今往来トノ観ヲ存ス、故ニ後天ニ於テ、万有感覺ヨリシテ、我カ心ニ映スル時ハ、我レ之ヲ観テ、時ト処トニ於テ、之ヲ判ス、譬ヘバ、今一匹馬ヲ見ル時ハ、我レ之ヲ見ルノ瞬間ヨリ以前、既ニ此馬ノ在リタルト、又其瞬間ヨリ以後、必ス在ルヘキトヲ知ル、是レ宙観ニ落テ、時ニ就テ考フル者ナリ、又同時ニ、此馬ノ形状如何、其居処如何、足ヲ運ヒ体ヲ動カス如何ヲ知る、是レ宇観ニ落テ、処ニ就テ考フル者ナリト、…<sup>2</sup>

ここで、人性において理性（靈智）があるのは、あたかも家に窓があって明かりを受けているようなもので、理性が区別されるのは、この窓枠が分けているようなもの、その枠によって諸影を映するとのカント理解の是非には立ち入る必要はありません。注目されるのは「靈智ノ窓格ハ、宇観ト宙観トノ如シ」と述べている点です。西周がここで、宇観と宙観と述べる<sup>space</sup>宇<sup>time</sup>と宙とについてなのです。

彼は宇によって欧米語のスペースを想定しています。スペースをいかなる言葉に翻案するかについて、彼は宇を当てたのです。今日であれば空間という言葉でしょうが、いまだ邦訳のない時代のことです。宙はタイム、すなわち時間です。彼がこれらの言葉を当てたとき、念頭においていたのは、「淮南・齊俗訓」にある次の言です。

往古来今謂之宙、四方上下謂之宇

彼は上記引用の注記で、

宇観ハ上下四傍、宙観ハ古今往来也、原語ハ廣サ及ヒ時ノ字ナリ<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 『西周全集』、第一巻、三三頁。漢字によっては新字に変えた。また、ルビ等は省略した。

<sup>3</sup> 前掲書、三五頁。

と述べていますから、スペースが広がり、タイムが時を指すことは承知のうえであったと思われます。

しかし、往古来今之ヲ宙ト謂フ、四方上下之ヲ宇ト謂フという古来の意義において捉えようとした。もともと宇宙とは天地の意義で、天の覆うところを宇、地の依拠するところを宙といたしました。

彼は、これらに観の字を添え、宇宙を観る主体を中心に置いて、空間と時間を考えようとしたわけです。そこではスペースは上下と前後左右の四傍であり、ある中心から無辺へと広がるものです。またタイムは、主体が古きに往き今に来たることとし、かかる往来をなしているものとして宙観をもつ人間を考えているといえるでしょう。

## 上下四傍を生きる

私たちは各自がそれぞれの宇観宙観のうちに時間空間を生きています。上下四傍に広がる経路を通して、他者の経路と交差しつつ、宇と宙が形作られるとも言えます。多数の中心はその経路を通して連絡し、網状の関係を形成していきます。そこでは誰もが主人公です。そして誰もが中心で、己が上下四傍をたどりまわります。その広がりによって時間が配当されれば、その人の人生ということになります。

こうした見地は一極に中心の存するとする観念と対立します。中心はどこにでもあるとする観念の成立をみるからです。宇観・宙観とは、空間と時間を私たちに引き寄せる観念かもしれません。

WATは分散的で自律的なシステムであることで、こうした私たちの意識の転回を可能にするでしょう。どこかに中心があるはずで、それを探そう、そしてその中心を仰ぎ見て周辺として振る舞おう、そんな姿勢ではなく、中心は他ならぬ君自身だ、君が宇観・宙観のうちに君は他者と連帯していく、WATの体験で確認しうるメッセージのコアはそこにあるといえるでしょう。

## quote of this week

### 五十歩百歩 - 「貧乏人の定理」より -

ケルンの大聖堂だろうが、サーカスのテントだろうが、

洗濯屋の屋根からだろうが

転落する労働者にとっては

まったくもってどうでもよい。

( エーリヒ・ケストナー/斎藤由紀子 訳  
Erich Kästner, Kurz und bündig )

## 週刊マーケットレター（06年8月21日週号）

2006年8月20日

曾我 純

### ■主要マーケット指標

為替レート	8月18日（前週）	1カ月前	3カ月前
円ドル	115.80(116.30)	117.30	110.80
ドルユーロ	1.2825(1.2720)	1.2500	1.2845
ドルポンド	1.8815(1.8905)	1.8265	1.8915
スイスフランドル	1.2330(1.2425)	1.2525	1.2085
<b>短期金利（3カ月）</b>			
日本	0.42000(0.41375)	0.40500	0.19250
米国	5.39938(5.40500)	5.50000	5.18938
ユーロ	3.23700(3.21900)	3.10613	2.89413
スイス	1.63000(1.59000)	1.51917	1.40833
<b>長期金利（10年債）</b>			
日本	1.850(1.850)	1.825	1.940
米国	4.84(4.97)	5.13	5.06
英国	4.63(4.77)	4.67	4.60
ドイツ	3.89(3.98)	4.00	4.01
<b>株 式</b>			
日経平均株価	16105.98(15565.02)	14437.24	16087.18
TOPIX	1641.45(1577.92)	1475.28	1632.08
NYダウ	11381.47(11088.03)	10799.23	11128.29
S&P500	1302.30(1266.74)	1236.86	1261.81
ナスダック	2163.95(2057.71)	2043.22	2180.32
FTSE100（英）	5903.4(5820.1)	5681.7	5671.6
DAX（独）	5817.02(5628.37)	5396.85	5666.07
<b>商品市況（先物）</b>			
CRB指数	332.32(344.53)	341.85	348.65
原油（WTI、ドル/バレル）	71.14(74.34)	73.54	69.45
金（ドル/トロイオンス）	612.1(633.5)	628.3	679.6

### ■ 米消費者物価の上昇はまだ続く

先週、NYダウは5営業日連続の値上がりとなり、5月中旬以来の高い水準に上昇した。7月の米物価指数がFRBの利上げを押しとどめるような内容を示したことを好感したからだ。7月住宅着工件数が04年11月以来の低い件数に減少し、8月のミシガン大学消費者センチメント指数の悪化も政策金利の引き上げが行わないだろうという判断材料になったようである。米国の景気減速とインフレ懸念の後退により、原油をはじめとする商品市況は下落し、

債券は買われた。週間では、主要通貨に対してドルはやや弱含む程度であり、為替相場への影響は限定的であった。

7月の米生産者物価指数は前月比0.1%と落ち着き、食品・エネルギーを除くコア指数は-0.3%と昨年10月以来のマイナスとなった。前年比でもコア指数は1.3%と前月より0.6ポイント低下した。ウエイトの4割弱を占める耐久消費財と資本財の価格が前年割れや1%台の低い伸びにとどまっていることが、生産者物価指数の上昇を押えている。

### 米設備稼働率と物価



消費者物価指数（CPI）は前月比0.4%と前月よりも上昇率は高くなったが、前年比では4.1%と前月を幾分下回り、さらに上昇するという情勢ではない。コア指数は前月比0.2%増と前月よりも0.1ポイント低下したが、前年比では2.7%と4ヵ月連続で上昇率は高くなり、FRBが目標にしているPCEが2.25%~2.5%（06年10-12月期）の範囲に収まりそうにない。ただ、CPIの42.4%のウエイトを持つ住居は前年比4.1%上昇し、総合指数への寄与度は約4割と高いが、7月の住宅着工件数が前年比13.3%減少したことから、住居はCPIを徐々に引き下げるのではないだろうか。

7月のCPIコア指数の前年比伸び率は2.7%と01年12月以来約4年半ぶり高い伸びとなり、FRBもまだ物価情勢から目を離すことはできないように思う。物価と関連深い動き方をする設備稼働率は7月、82.4%と2ヵ月連続で上昇し、前年の水準を2.2ポイント上回った。普通、CPIは設備稼働率に遅行する傾向がみられ、設備稼働率が上昇している段階では、CPIの上昇はまだ続き、年内、伸びがピークアウトすることは考え難い。

### ■ 米国の原油輸入減で原油高もピークか

米鉱工業生産指数は7月、前月比0.4%と2ヵ月連続のプラス、前年比も4.9%増加し、米国

の生産は拡大している。生産は拡大しているが、06年1－6月期の米石油関連製品輸入量（原油含む）は前年比2.0%減と半期ベースでは02年1－6月期以来、4年ぶりのマイナスとなった。原油価格高による節約の影響もあらわれているが、米国景気が減速に向かっている兆候なのかもしれない。原油の輸入量に限れば、05年7-12月期に前年割れとなり、06年1－6月期も2.7%減少した。原油価格は1バレル=70ドルを依然超えているが、すでに1年、米国の原油輸入量は前年を下回っており、需要は減退している。原油市場がこうした事実を直視することになれば、中近東の不安材料はあるものの、原油価格は間違いなく大幅に下がるだろう。

実需ではなく投機により嵩上げされているだけに、原油価格は急落することになるかもしれない。原油高によるインフレ懸念を抑えるため、8月3日、ECBとイングランド銀行が政策金利を引き上げたのに続いて、18日には中国も利上げを発表した。世界的な金融引き締めが資金の調達コストを引き上げ、投機資金は締め出され、投機主導で値上がりした商品市況は打撃をうけることになろう。商品市況高の終焉は世界のインフレ懸念を一掃し、債券相場は活気付き、株式も活況になるだろう。

米国の金融引き締めは過ぎ去り、金融緩和期待が一気に膨らみ、企業の期待収益率は高まり、設備投資マインドは強くなるはずである。商品市況の変化は激しくだれも予測できないが、最大の石油製品輸入国である米国の減少のインパクトは侮れない。過去のオイルショックがそうであったように、いつまでも値上がりが続くわけではない。原油高もピークに達し、反落する時期に差し掛かっているようにも思える。

ゲゼル研究会では第二期「人間の経済」誌の原稿を募集しています。

ゲゼル研究会では会誌、「人間の経済」を刊行してまいりましたが、会員の各地に叢生する地域通貨の動きへの関与等により、刊行継続の体制がとれず、1年ほど休刊のやむなきに至っております。

しかし、社会経済状況の変化や多様化する各地の貨幣改革の展開を見るに、時宜を得た会員の諸研究を世に問う必要性を痛感しているところです。

また、各地からの問い合わせ、情報提供の依頼も多く、会としての系統的な情報の提供、焦眉の課題に関する研究成果の迅速な公開の必要性も強く感じてきたところです。

今般、体勢を立て直し、会誌「人間の経済」再開（第二期創刊）に取り組むこととなりました。

基本的な会誌の性格は第一期と変わるものではありません。

理論的な研究から各地の取り組みの現状、そのナマの声まで、多様なテーマの論考を掲載していきたいと考えております。

広く論考を求めていますので、諸姉諸兄のご支援、ご協力をお願いいたします。

第二期、「人間の経済」、簡易印刷版、及びHPでのPDF版提供

不定期刊

投稿資格 特に設けず

投稿 常時受け付け

投稿論文の著作権は著者に帰属

原稿料はありません

ご連絡は [info@grsj.org](mailto:info@grsj.org) まで。

人間の経済 第二期 第58号(通巻136号)  
2006年8月28日刊

---

編集・発行 ゲゼル研究会  
221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321 森野榮一気付  
Gesell Research Society Japan  
<http://grsj.org/>  
[info@grsj.org](mailto:info@grsj.org)

**Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず**

---

頒価 1ワット



ゲゼル研究会